

# 取材帳拡大版

## 自治体の参加者が増加

○：下水道展で気になるのは、やはり参加者数。今回は、東京開催ということで期待の10万人に届くかどうかというのが一つの焦点。が、残念ながら8万人台にとどまった。それでも出展者数やコマ数が減った一方で、前回横浜展を上回る参加者を得たことは、まずは成功といったところか。一方、地方公共団体の参加者数も前回、前々回よりも増加したこと。新技術・製品を一堂に会する下水道展は、いわば地方公共団体に見てもらおうが一番の狙い。それだけに今後さらなる参加者増が期待されよう。

## 首長懇談会の議題に？

○：とは言え、地方公共団体の下水道展をとり巻く状況は厳しい様子。もちろん複数の地方公共団体が周辺市町村に声をかけ合い、効率的にバスに乗り合わせ参加し、たくさん民間企業ブースなど熱心に足を運ぶ光景も多々見られた。しかし、なかには「有休」「自腹でないと下水道展に参加できない」という自治体も数多くあるよう。これは弊紙での下水道展のPRがまだ足りなかったのか、あるいは自治体の下水道に対するプライオリティが低いのか。大きな要因の一つは自治体の財政難のよう。再構築や管理の効率化、コスト削減等、技術的な課題解決に大いに参考になると思うのだが、無い袖は振れない、ということか。これは首長・管理者に、もっと理解を深めてもらいたい。下水協の首長懇談会などで、とくと話し合ってみてはどうだろうか。

## 民間発の情報発信を

○：産官学の関係者が一堂に会することこそ、下水道展と研究発表会が合同で開かれることの醍醐味。単純に比較するのはいかなるものかとは思いますが、海外の展示会では、セミナー、新製品の発表会や情報交換会は人の集まる場を利用して至る所で行われる。29日に開かれ、下水道展期間中の恒例となりつつある雨水技術情報交換会では、産官民学のメンバーが集い、自由に情報交換が行われた。1年に一度の貴重な4日間。展示ブースや公的イベントの活用だけでなく、下水道展期間を利用した民間主催の情報交換の場を設けることも下水道展活性化のヒントでは？

4日間にわたり、東京ビッグサイトを舞台に繰り広げられた下水道の祭典、下水道展09東京と下水道研究発表会。本紙では各所に記者を配置し、来場者、参加者、出展者の生の声を聴取。下水道事業が転換期を迎えるなか、下水道展に臨んだ関係者の声と、本紙記者の思いと主張を紹介する。

## 肝心なのは前向きな行動

○：ここで出展者の声をひとつ——「いろいろな意見を言われる人はいません。しかし、まだ捨てたものじゃない。確かに海外の展示会と違って、直接的なビジネス交渉ができるわけではないが、こんなにたくさん来場者が訪れる。わが社の技術に興味を示していただければ、われわれが直接お客様の現地に赴き説明すればよいし、現地に行ったほうが、逆にたくさんお客さまの声を聞くことができる。街の雰囲気を感じることが出来る。私どもはそういう方針で展示会に参加しています」と前向きな行動はビジネスチャンスを広げる。

## 子供も観たい企業ブース

○：子供連れで下水道ふれあい広場に訪れたお父さん、「子供は、若手芸人さんのライブを楽しみにしていたのですが、もともと機械を動かすのが好きだったせいも、後ろにたくさん展示している企業ブースのほうのロボットやパソコンに興味を示したようですが……」と。どうしたのかと思いきや「ある企業のブースに行ったら『名刺を持ってきて』と言われたようです」と。出展者のビジネスも大切だけれども、下水道の主役は国民であるということはお忘れなく。ましてや子供は次世代の宝。大切に。

## 楽しい物まね！下水道は…

○：一般参観者を対象としたパブリックゾーン。こちらは、たくさん親子連れや子供連れで賑わった。ただ例年に比べ子供達の参加が少なかった…とは関係者の声。このゾーンは一般の人達に楽しみなが下水道を理解していただくという狙い。開催地を初め近隣の公共団体等に出展を依頼し、下水道の役割や正しい使い方を紹介してもらったコーナー。地方公共団体を中心に民間も含めて15団体が出展した。

江戸屋小猫さんのものまねスペシャル(下水協)、タレントが出演したお笑いライブステージ(同)、ダイエツトレンジの試食会(東京都)、記念品付きの下水道クイズコーナー

1(下水協関東地方支部)などには大勢の親子連れが。対して資料やパンフなどしか出展していないブースは閑古鳥?この辺は一工夫が必要とは担当者。総じて体験・参加型ブースやクイズ・試食コーナーには人気が集まった。問題は下水道にどれだけ理解を深めたかである。子供達に何が面白かったか、と聞くと「小猫さんのものまね」。下水道について勉強になったことは?にはじっと考えたまま無言であった。果報は寝て待てか。

## 下水道展初で唯一の試み

○：恐らく下水道展史上初で唯一となる試みではなからうか。そのブースは、誰が見ても力作といえた。しかし何が一番すごいかというと、煌びやかな装飾でもなければ最新技術の展示でもない。そこでは目には映らないが、『カーボンオフセット』という地球温暖化防止対策の一手法を実行していた。ブースの施工・撤去時や資材の製造・輸送等に排出されたCO<sub>2</sub>(約42トンを、他者から購入した排出権で埋め合わせ(オフセット)、見かけ上、温室効果ガス排出量をゼロにするというもの。

その企業は、今回の展示に合わせ、インドの小水力発電プロジェクトからCO<sub>2</sub>排出権(42トンを調達。さらに、その排出権は日本政府へ無償譲渡され、京都議定書における日本の削減目標に貢献するという。『購入金額は僅か』というが、地球温暖化でゲリラ豪雨が頻発する昨今、多くの出展企業が浸水対策技術を紹介するなかで、地味かもしれないが、キラリ光るその試みに、新たな展示手法の可能性を垣間見た。

## 人を引きつける「金」

○：耳目を引いたのは下水道事業団が出展した「下水汚泥からの金」。金の「溶融飛灰」と抽出した金350g。長野県諏訪湖流域下水道豊田処理場で下水汚泥の焼却灰から見つかった話題となった。やはり金の威力はすごい、とは出展者の感想。同処理場には年間約30kgの金が流入しているというが、その正確な発生源は不明。J Sブースで解説を行っていた長野県下水道公社の小林和広氏によれば「精密機械工場の排水が温泉脈に由来するのかもしれない」。金価格の上昇もあって20年度の金の売却収入は4000万円という。J Sの村上孝雄技術開発部長は「暗い話が多いなかで、明るい話題を提供したかった」とのこと。

## 進歩する下水道研究

○：「下水道研究発表会は技術と人の交流の場」と日本

下水道協会理事の佐伯さん。次世代技術の創造と人材の育成へ、毎年新たな試みを行っている研究発表会。今年は……「4月に下水道クローバルセンターが発足し国際貢献を本格的に展開していくことから、これまで韓国セクションとして開催していたものを中国城鎮給排水排水協会を新たに加え、アジアセクションを開催します」と。国内はもとよりアジアの国々との技術と人の交流。さて、来年はどんな新しい取り組みが……期待!

## 押し寄せる国際化の波

○：下水道展来場者の首にかけられる色分けされた来場者種別のカード。年々目立つようになってきたのが紫色の「外国人」。今年は、中国、韓国からの団体客が急増。下水道研究発表会の初の試み「アジアセクション」も大入り満員。「国際関係の行事は人を集めるので苦労していましたから、昔から考えれば信じられませんが」と事務局はうれしい悲鳴。一方、研究の国際協力セクションの発表は3編といささか寂しい。日本からの発信以上に「国際化の波」は急速に押し寄せているようだ。

## 下水道展、10名古屋へ

○：30日に下水道展会場を訪れたのは、名古屋市の山田雅雄副市長。「ヒューム管用の耐震継手など以前は考えられなかった」と日進月歩の最新技術に感嘆。しかしながら「ブース配置の隙間が多くなって寂しい」と洩らす一面も。「アジア各国の来場者が多いが、新設だけではな管更生にも興味を示されているのが意外だった。また、J S東海総合事務所にいたるに現場から携帯電話やインターネットで情報を上手く送ろうと苦心したことがあったが、コンサルの展示にその完成形であるGPSシステムがあった」と講評、来年の名古屋開催への思いをつないだ。

## 来年の弊紙にも期待を

○：下水道展に出展する民間企業はほとんど「下水道事業を通じてよりよい社会貢献をしていきたい」と思っているところがほとんどだろう。このご時世、各社とも出費の抑制がはかられるなか、懸命に捻出した宣伝費をかけて展示会へ臨んでいる。これも下水道展が自治体と民間との意見交換の場であるからである。来年の名古屋下水道展は展示企業、来場者にとって、一層有意義なイベントとなることを期待したい。また弊紙のPRにも期待して欲しい。

◇ ◇ ◇